

## 菅組

### 宮大工に始まり匠の技を繋ぎ続けて168年

最北端の宗谷岬から南の八重山諸島まで、延々三千キロにわたって弓状に連なる日本列島は、その国土の三分の二が、森林によって覆われています。いま、この緑の列島に異変が起きています。破壊的ともいえる、山の荒廃です。

中略

私たちの祖先は、ごく自然に木という素材を選び、のこぎり 鋸、かんな 鉋、のみ 鑿などの道具を用いて家を建ててきました。そこには人がいました。山を守り、木を育てる人。木を伐り、製材し、運ぶ人。材を加工し、家に組立てる人。いま、山から人は失われ、職人の腕は低下したと嘆かれ、柱のキズで背比べする姿は消えたかにもえます。

山の荒廃をストップさせ、木の文化をよみがえ蘇らせるには、何を、どうしたらいいのでしょうか？

この一文は2001年（平成13年）元旦、NPO法人緑の列島ネットワークの呼びかけで朝日新聞に掲載された意見広告『近くの山の木で家をつくる運動』の宣言文の一部。この意見広告に賛同した人は2271人。地域材を使用した建築物推進



森林

という対象者が絞られた意見広告としては予想以上の反響だった。

この運動に賛同し、地域材を積極的に使い山の荒廃を防ぐ活動をしているのが香川県三豊市仁尾町の株式会社菅組。同社は宮大工として始まり、鋸、鉋、鑿などの道具を使い、匠の技を繋ぎながら168年の歴史を持つ。

その永い企業の歴史を支えているのが三つの社是。

## ◆菅組の社是

### 《計画 誠実 行動》

社是は1980年（昭和55年）現社長の父で、3代目社長菅善明が掲げた。

計画……何事も、よい考えによるよい計画がなされなければ、物事は成就しません。広くは経営計画をしつかりと組み立てること。工事施工については、施工計画、工程計画、予算計画が、その工事のすべてを左右することになります。

誠実……最近のお客様のニーズは多様化しています。この業界において、今後地域に密着した活動を続けるうえで不可欠な要件が「誠実さ」であると思います。

行動……物を作る、仕上げる。我々の業務には行動なくして成就はありません。「知力」「徳力」がいかに優れていても、行動が伴わなければ無意味です。行動なくして成果は望めないことを肝に銘じましょう。そして、人生何といっても最後の勝利をもたらすのは、健康（体力）です。（一部略）

3代目社長菅善明は、当時社是を掲げた理由について、「建設業の特徴は多くの人手による作業集積によっ

て、他業種には見られないほどの長期にわたり、作業現場を世間の目にさらされる。作品の仕上がりはもちろん、現物そのものが会社をアピールする出先機関としての役割を担っており、お客様から見れば（現場環境への取り組み、作業職人たちの態度や所作や言葉遣い、接客態度や人間性）などを評価していただく舞台」と自身の著書に書き記している。

## ◆会社概要と社長プロフィール

本社は香川県三豊市仁尾町。仁尾町は荘内半島の付け根に位置し、通商産業省（現経済産業省）のパイロット事業として太陽熱発電事業が実施されたのを記念して1981年（昭和56年）『仁尾太陽博覧会』が開催された町として知られる。

同社の従業員数は113名。資本金7500万円。売上高は約79億円（2015年9月期）。

事業の内容は建築工事、土木工事、一級建築士事務所、不動産事業など総合建築請負業。他社と違うのは、宮大工グループなど大工の棟梁を擁していることや、設計部のスタッフが10名余りと設計施工の比率が高いこと。建築物は病院、公共施設などの施設建築、一般住宅、リフォーム、古民家再生まで幅広い。最近では介護福祉施設が増えてきた。

完工高のシェアでは民間工事が約7割強を占め、残りが公共工事など。

宮大工で創業した歴史もあり、匠の技を継承した宮大工グループを擁し神社仏閣の建築も得意とし実績も多い。

匠の技を繋ぎながら街並みづくり



菅組本社・正面吹き抜けエントランス

菅徹夫社長は1961年（昭和36年）3代目社長善明の長男として生まれた。高校まで地元で育ち、1983年（昭和58年）神戸大学工学部建築学科を卒業。同大学院修士課程を修了後は中堅ゼネコン藤木工務店に入社。同社ではマンション系の設計を担当した。一級建築士の資格を持っている。約5年勤めた後故郷に帰り、1990年（平成2年）菅組に入社し建築・設計などの現場からスタート。専務などを経て2008年（平成20年）社長に就任した。

家族は妻と1男1女の4人。社外での活動は2001年（平成13年）みとよ青年会議所理事長を務めたが、その2年前にNGOネットワーク「地球村」の高木善之代表を招き地球環境フォーラムを開催したのが思い深いという。趣味は東京のサラリーマン時代に度々行ったスキーだが、現在はベール小屋（煙草乾燥小屋）や出水の探索、ピオトープなど。ピオトープは管理士の資格を持ち自然や歴史文化などを活かしながら街づくりを進めている。香川県下のベール小屋は全国で2番目に多いといわれ、香川県下だけで300軒以上の建物小屋を確認し写真集を制作している。「ベール小屋研究会」、「讃岐の出水を守る会」を立ち上げ、「ベール小屋研究会」では会長を担っている。



菅徹夫社長

菅徹夫社長は建築物を自然と調和させ環境的な価値観を組み込ませたいと考え、歴史・文化遺産や自然資源の発掘を活かしながら、讃岐特有の建築文化づくりを目指している。その一つが「讃岐舎（さぬきのいえ）」で、ベール小屋のように屋根の上に更に一段高く小さな屋根を設けた設計になっている。また内装も木を多く露出させ温かみを出している。

今後の事業展開では、リフォームと古民家再生事業に力を入れている。そ

のための提案スペースとして本社の近くに「古木里庫」を設置している。「古木里庫」は古材で建てたギャラリーや古民具をはじめ地元作家の家具などを展示販売するスペースを設けている。また建築解体で産業廃棄物として処分していた古民家などの柱や梁などの古材や、古い時代の農機具、建具をリユースするために収集し、その格納庫にしている。

## ◆菅組の歴史

↳宮大工から総合建築請負業へ

1994年（平成6年）3代目社長菅善明の自宅改築時に和紙に墨入れした鐘楼堂の図面が納屋で見えられた。この図面右に「弘化5年表屋廣治」と書かれていた。

表屋は菅家の屋号で、廣治は菅善明から4代前のルーツになる。弘化5年はアメリカのペリー提督率いる黒船艦隊が浦賀に現れた5年前の1848年で、この時期にルーツの廣治が宮大工として働いていたことが分かった。時代はここから約60年下る。菅米吉が1909年（明治42年）、香川県より大工職鑑札を受けている。この大工職鑑札の記された年を菅組は創業年と定めた。

仁尾町の産業は農水産業が中心で、讃岐三白の一つ塩田開発は大正の時代に入る。当時の仁尾町の大地主の塩田忠左衛門は塩田開発に乗り出し、工事の一部に大工の高い技量の持ち主として知られていた菅米吉を指名した。工事内容は塩田の周囲に築かれた塩壺の上家の取り付けだった。菅米吉は工期を予想以



ベール小屋



「古木里庫」(ギャラリー内部)



手書きによる鐘楼堂



粟井神社(観音寺市)





創業者 菅米吉



大工職鑑札

上に早く完工したため塩田忠左衛門から厚い信頼を得た。このため塩田忠左衛門の関わっていた賀茂神社神殿、覚城院、仁尾小学校など町内の主な施設の建築を請け負うことにもなった。菅米吉は正月に塩田忠左衛門の台所のまな板の削り取りまで任されるほどで、家族同様に寵愛されていたことが窺える。

菅米吉の後を受け継いだのは、2代目菅順一で戦後の荒廃時からのスタートだった。当時の菅組は大工、左官、土工など職人の集団だった。この職能集団を率いながら苦労している父の後ろ姿を見ながら、菅善明は一日も早く家業を手伝いたいと思っていた。1954年（昭和29年）多度津工業高校建築科を卒業すると同時に父の下で働き、大工と土工を2年程経験した。当時、会社はまだ重機を導入してなくスコップやツルハシを使って全てが手掘りだった。菅善明のひ弱な体も現場の仕事を通じて鍛えられた。菅善明にとって初めての建設現場は比地二村小学校の講堂新築工事だったが、棟梁真鍋嘉三郎の木材の墨付けの出来栄えに感銘したことを今も忘れることができない。



2代目社長 菅順一

この後、1957年（昭和32年）仁尾塩田は入浜式から枝条架流下式製塩に転化するが、施工工事の半分を委ねられた。木造建築中心から初めてRC建造物（鉄筋コンクリート造）を請け負ったのが1958年（昭和33年）の三豊第一病院外来診療棟新築工事だった。大阪の建築事務所の設計で都会的なデザインの建造物を完成することが出来た。多くの建築実績をもとに1962年（昭和37年）株式会社菅組へと称号変更



3代目社長 菅善明

更。同時に菅順一が町会議員に立候補したため、菅善明は弱冠27歳で3代目社長に就任した。

社会は池田勇人内閣から田中角栄内閣の高度経済成長ブームで、建設注文に応えきれず断るケースも出るほどの右肩上がりの時代を迎えた。菅善明は思い出のある建築工事として、五郷溪温泉ホテル、丸一鋼管・詫間工場、アオイ電子観音寺工場、仁尾太陽博パイロットプラント、財田町たからだの里「環の湯」などを挙げる。社外では仁尾町商工会会長、三豊市商工会会長などを歴任した。



4代目社長 菅磯夫

2001年（平成13年）4代目社長に菅善明の弟菅磯夫が就任。好景気の時代から一転して、バブル経済が崩壊し、失われた20年と呼ばれるデフレ社会の時代だった。4代目社長菅磯夫の経営は時代に合った堅実な舵取りで、環境に優しい物作りを心掛けた。その一つにOMソーラーがある。新鮮な空気を太陽熱で温めながら取り込み、床下に運んで床を温めたり、湯を沸かしたりする。家全体を循環して換気も可能なシステムで積極的に推進してきた。

2008年（平成20年）、アメリカのリーマンショックは日本の経済にも大打撃を与えた。その年、4代目社長菅磯夫は7年間の経営を退き5代目を甥の菅徹夫にバトンタッチした。

## ◆NEXT100年へ

次の世代も匠と共に生きる



2015 伐採ツアー

な木がゆっくりと倒れていくと「オー」と思わず歓声上がる。

日本の建設業界の特徴の一つに元請け、下請け、孫請け、さらには曾孫請けまでの多重構造がある。このように受注物件を外注依存する傾向が大きい建設業界の中で、菅組は設計や大工などの技能職人を30人近く擁している。中でも匠の技を持つ宮大工や住宅部門の各グループには、創業者米吉の時代から3代、4代と続いている系譜の職人が4組も働いている。自社一貫施工システムの下で、100年余の後、も人と匠の技は脈々と継承されている。建設業界の中でも珍しい。

菅徹夫社長は「そこに地域に愛される企業としての生き方があり、また技術集団としての誇りと伝統がある」と語る。

大黒柱伐採ツアーは2015年の秋で14回目を迎え、伐採した檜を大黒柱にした新築家族も50組を超えている。讃岐の山で育った木が、匠の技によって大黒柱とな



宮大工の仕事風景

り100年の後も家と家族を支えていく。(敬称略)

参考文献

「仁尾町史(町史編集委員会)」、「建築ひとすじに(菅善明)」、「続ペーハ小屋の讃岐」(菅徹夫)